

内視鏡的大腸ポリープ切除治療について

内科診療部長 いいだ 飯田 ともひろ 智広



消化器内視鏡というと、皆様が人間ドックや健康診断で受けて頂いている胃カメラが思い浮かぶでしょう。内視鏡(ビデオスコープ)は、数十年前に登場し目覚ましい進歩と変化をしております。現在胃カメラの他に大腸用の大腸内視鏡、小腸用の小腸バルーン内視鏡、カプセル内視鏡、胆膵鏡など臓器によって、専用の器具を使用して検査を行います。日本は、世界的にも内視鏡検査、治療は常に先頭を歩んでいます。

内視鏡治療といいましても胃や大腸の出血を来たす病変、例えば①潰瘍や癌からの出血、②肝臓疾患から来る食道静脈瘤破裂出血の止血、③胃や小腸、大腸の狭窄(腸が狭くなり、食べ物や便が通過しない状態)に対する拡張術、④胃、大腸のポリープ病変や早期胃・大腸がんの内科的切除治療など非常に多彩です。

今回全てをご紹介するのは難しいので、大腸内視鏡治療、大腸ポリープ切除治療及び粘膜切除治療についてお話ししたいと思います。特に最近では胃がんよりも大腸がんが急速に増加しております。従来は20mm前後の大きめのポリープや早期の大腸がんでも大腸手術(大腸切除)を行うことがありました。

現在は技術や機器の進歩があり、かなり大きいポリープや早期の大腸がんも大腸切除手術をせずに内科的に内視鏡で切除治療ができるようになっております。

大腸ポリープは、5mm以上のポリープは切除対象となります。大きさや形態にもよりますが、早期大腸がんやポリープでは、だいたい20mmまでの病変は内視鏡で治療が可能な場合が多いです。

検査では大腸の便を出来る限りきれいに洗浄する必要があります。専用の腸管洗腸剤(約2ℓ)を、飲むのは大変ですがしっかり服用して腸の便や残液をしっかり排便していただきます。

当院では、抗血栓薬(脳梗塞や心臓疾患で血液がさらさらとなり血が止まらなくする薬)を検査時に休みにできる患者さんで、入院可能な場合は大腸ポリープや早期大腸がんを検査と同時に治療、切除を行っています。通常はその日は食事を中止し1泊入院をお願いしています。大腸ポリープ病変の真下に内視鏡から専用の細い注射器(局注針)を刺入して、生理食塩水などを注入します。ポリープ病変を腸粘膜から浮かすようにしてからスネアという金属性のワイヤーを病変にひっかけて、締めながら電気メスで凝固すると切除できます。出血がないことを確認して終了となります。後日ポリープ病変の顕微鏡(病理組織)検査結果で、追加手術(大腸切除やリンパ節切除)が必要となることがあります。

当院では、年間約1300件の大腸内視鏡検査と約200件の大腸ポリープ切除(内視鏡治療)を行っています。大腸内視鏡検査は決して楽な検査ではありませんが、大腸がんが進行した状態で発見される患者さんが多いのも事実です。大腸がん検診と精密検査である大腸内視鏡検査を積極的にお勧めします。

